

パウロにおける「神の選びの対象」

— コリントの信徒への手紙—1章27節の中性形の 解釈を通して—¹

The objective behind ‘God’s Choosing’ in Paul
— understanding 1 Corinthians 1:27 through
the interpretations of the Greek neuter words —

古森 敬子
Keiko Komori

キーワード

パウロ、神の選び、中性形、愚かさ、弱さ、十字架の言葉、宣教、十字架につけられたキリスト

KEY WORDS

Paul, God’s choosing, neuter form, the foolish things, the weak things, the message of the cross, preaching, Christ crucified

要旨

この研究はコリントの信徒への手紙—1章27節の、パウロが神の選びの対象物として選んだ言葉 τὰ μωρά と τὰ ἀσθενή の解釈を扱うものである。

これらの語は形容詞に冠詞を伴った名詞的用法の中性形であり、一般的に「事」などの事物を指し示し、「人」を意味しない。しかし現在に至るまで、多くの聖書学者がこれらを「人」として解釈してきた。本研究ではこの中性形を文法的側面とパウロの用法からの考察を経て、「事」であるとする。そしてその後「事」で示される神の選びが、「十字架の言葉」、「十字架につけられたキリスト」、「宣教」という神の出来事と、それを信仰をもって受け入れたコリントの信徒を包含したものであると位置づけ、新たな聖書解釈の一考察とするものである。

SUMMARY

This paper discusses I Corinthians 1:27, focusing on the objects of ‘God’s choosing,’ i.e., τὰ μωρά and τὰ ἀσθενῆ. These two words, indicating the objects chosen, are presented as adjectives in the accusative neuter plural form with the article. Although the neuter form is usually translated as ‘thing,’ scholars have interpreted these adjectives as ‘people.’ By examining ancient Greek grammar and Paul’s usage of these terms in his letters, I suggest that these words do not mean ‘people’ but rather ‘things.’ New understanding of these ‘things,’ ‘the message of the cross,’ ‘Christ crucified,’ ‘preaching,’ and ‘those who had accepted these “things” by faith’ will arise while discussing their possible meanings.

1、はじめに

コリントの信徒への手紙一1章27節（以下必要に応じて I コリ1:27と略す）

ἀλλὰ τὰ μωρὰ τοῦ κόσμου ἐξελέξατο ὁ θεός, ἵνα καταισχύνη τοὺς σοφοὺς,
καὶ τὰ ἀσθενῆ τοῦ κόσμου ἐξελέξατο ὁ θεός, ἵνα καταισχύνη τὰ ἰσχυρά,²

には神が選んだものとして τὰ μωρά と τὰ ἀσθενῆ が挙げられている。τὰ μωρά を神が選んだのは τοὺς σοφοὺς に恥をかかせるためであり、τὰ ἀσθενῆ を選んだのは τὰ ἰσχυρά に恥をかかせるためである、とパウロは述べる。この四つの対比的に並べられた言葉の内 τοὺς σοφοὺς のみが男性形で、あとの三つは中性形である。特に神が選んだ二つの語はどちらも中性形である³。

本来、ギリシア語では人を示したい時には男性形を用い、事柄を示したい時は中性形を用いる。しかしこの箇所の中性形は翻訳されるにあたり「人」と「事」の両方が歴史的に用いられ、そのどちらの訳語を用いつつも多く、多くの聖書学者は「人」と解釈をし、パウロの主張する神の選びの対象が「人」とであるとみなしてきた。この訳語と解釈の一例である日本語訳の新共同訳聖書では、この個所は「ところが、神は知恵ある者に恥をかかせるため、世の無学な者を選び、力ある者に恥をかかせるため、世の無力な者を選ばれました⁴」と訳されている。この訳は神が「知恵ある者」（これは男性形であるので明らかに人を示している）や「力ある者」に恥をかかせるために「無学な者」と「無力な者」を神が選んだとパウロが主張しているという印象を読む者に与えている。果たして、現在に至るまで多くの聖書学者たちはこれらの語を「人」であ

るとし、神は「無学な者」や「無力な者」という人間に選びを示されたのであるという解釈を示してきた。

しかしパウロは「知恵ある者」以外の三つの語を、特に神が選んだ対象の語を意図的に中性形で表している。パウロは四つの語すべてに「知恵ある者」と同じく男性形を使用することができたにもかかわらず、あえて中性形を用いている。この意図的な中性形の使用にパウロの「神の選び」への思いが込められているのではないのか。

「無学な者」や「無力な者」という人間の条件を神が選びの対象としたとパウロは言いたかったのであろうか、それとも「人」ではない「事」を神の選びの対象として示すために意図して中性形を使用したのであろうか。この問題提起から始め、この中性形で表された神の選びの対象が何であるかを考察するものである。

ギリシア語テキストは Nestle-Aland 校訂 Novum Testamentum Graece 27版を使用した。同書においてこれらの語に異読の脚注はないゆえに本研究の考察対象である神の選んだ対象である二つの語が、冠詞付き形容詞の名詞的用法であるところの中性複数形であることをまず確認する。そしてこの27節の神の選びの例証は28節へと続いているが、28節においても27節と同じとみられる対比が提示されており、それらが中性形であることから、この27節の二つの中性形の考察が28節の中性形の解釈に適用できるとみなす。

また本節において神が選んだという動詞が2回印象的に使われている。この「選ぶ」(ἐκλέγειν) は Septuaginta と新約聖書で合計163回使用されているが、そのうち153回が中動態となっている⁵。ギリシア語では自分で自分のために動作することを表すために中動態が用いられるが、特に「神」と「主」を主語とするこの語の中動態は20回ありそれらの考察はこの神の選びの対象物が何であるかを知るために役立つと思われる。しかし紙面の関係上その考察をここに提示することはできないので、本稿では文の目的語であり神の選びの対象である中性形の考察のみとする⁶。

2、訳語と解釈

現在まで「聖書」は多くの翻訳がなされ、各国の教会で用いられてきた。その中からほんの一部であるが、例として幾つかの聖書を挙げることによりこの聖書箇所についての訳語の多様さの一例としたい。「者(人)」か「もの(事)」で分類して表に示す⁷。

表1、訳語の分類

分類	代表的訳語パターン	その他の聖書（略称で表示、正式名称は脚注 ^{8、9} を参照）
1	「無学な者」「無力な者」（新共同訳）	文語訳、永井訳、口語訳、詳訳、岩隈訳、
2	〈was töricht ist〉 〈was schwach ist〉 (L.U.T.) 〈what is foolish〉 〈what is weak〉 (R.S.V.)	N.R.S.V.
3	〔もろもろの〕〔愚かなもの〕〔弱いもの〕（岩波訳） 〈the foolish things〉 〈the weak things〉 (N.I.V.)	フランシスコ会訳、N.K.J.V.、K.J.V.、V.U.L.、A.S.V.

- *1、分類1は中性複数形を二つとも「人」と訳しているもので、いくつかの日本語聖書のみが該当する。
- *2、分類2は「事・物」など中性的な訳語を当てているが単数形としている¹⁰。
- *3、分類3は原語に忠実に「事・物」の複数として訳している¹¹。
- *4、27節の三つの中性形すべてに考察を広げればこの分類は4種類になるのであるが、神の選びの二つの中性形だけに対象を絞れば3種類となる¹²。

聖書自体の翻訳語において、このように「者（人）」と「もの（事）」との相違がみられるのであるが、さらにこの分類2、3の、「もの（事）」などと「人」ではないことを表す訳語の聖書を用いつつ、その注釈書においては「人」であると解釈をしている聖書学者がみられる。ゆえにまずいくつかの注解書を「人」解釈か「事」解釈かに分類する。

まず日本人によるもの8冊¹³と外国人によるもの11冊¹⁴を分類する¹⁵。

表2、解釈の分類

分類	解 釈	解 釈 者 ¹⁶
(a)	「人」	青野太潮 ¹⁷ 、内村鑑三 ¹⁸ 、高橋敬基 ¹⁹ 、蓮見和男 ²⁰ 、松永晋一 ²¹ 、松本卓夫 ²² 、宮村武夫 ²³ 、山室軍平 ²⁴ 、ヴェントラント ²⁵ 、カルヴァン ²⁶ 、Barrett ²⁷ 、Garland ²⁸ 、Godet ²⁹ 、Harrisvill ³⁰ 、Hays ³¹ 、Thiselton ³² 、
(b)	「事」	Conzelmann ³³ 、Grosheide ³⁴ 、Morris ³⁵ 、

これら (a)、(b) の分類の中からその主張が明確である解釈者、(a) はカルヴァン、Hays、青野太潮、(b) は Grosheide、を代表者として選びそれぞれの解釈の主要点を紹介するとともにその矛盾点と疑問点がある時にはそれを指摘する。

2-1 カルヴァン

16世紀半ばにカルヴァンは原語からラテン語に訳した³⁷。「それなのに神は、知者
をはずかしめるために、この世の愚かな者を選び、強い者をはずかしめるために、こ
の世の弱い者を選び、」とこの箇所を訳している。解説においてはこの聖書訳を引用
しつつ「〔27〕かれは、知者や身分の高い者をはずかしめると言い、〔28〕有る者を無
い者にすると言う。……『神が、貧しい者、軽蔑すべきものを選びたもうたのは、偉
大な者、知者、身分の高い者にまさってかれらを愛されたからである』と彼は言いた
いのである。もし神が、ただすべての者を同じ程度に扱われていたならば、肉の傲慢
を打ち倒すには十分でなかったであろう」³⁸とこの箇所の中性形を人として解釈し注
釈を施している³⁹。

この宗教改革の一偉人の解釈はその後のキリスト教の聖書解釈に大きな影響を及ぼ
し続けたのではないかと推測される。

2-2 Hays

Hays は注釈にあたり N.R.S.V. を用いている。この版は本論2の訳語分類表の2に属
し、単数形ではあるが中性的な「事」としての訳語を用いているものである。Hays
はその訳語を用いつつそれらを「人」と理解して解釈をしている⁴⁰。

彼は26節で、コリントの信徒たちの社会的、経済的、雑多性、混淆性に、召し集め
られた救いの共同体の特徴があると述べ、その雑多性に神の救いの特徴がみられると
指摘している。しかし、27節では、神はこの世でさげすまれた人々からなっている終
末的共同体を作りあげることによって、この世の知恵ある人々や力ある人々に恥をか
かせることを選んだとの解釈を示している。神の救いの特徴が「雑多性、混淆性」に
あるという主張が、後半「この世でさげすまれた人々」へと変化しているのである。
この変化は神の救い・選びに対しての整合性を損ない矛盾を生じさせている。雑多な
混淆集団が神に召され、選ばれたのであれば、その中での社会的・経済的・学問的な
差は選びの条件ではなくなるはずであるし、この世でさげすまれた人々が選ばれたの
であれば共同体の特徴は雑多性、混淆性ではなくなる。この矛盾は27節の中性形を
「人」と理解することによって生じたものであり、これらの語の解釈がこの段落全体
の解釈に大きな影響を及ぼしていることが分かる。

2-3 青野

青野は岩波訳聖書の翻訳において、この I コリ1:27の中性語を中性形であるからと
理由をつけて、「愚かなもの」「弱いもの」と中性的な訳語を使用した数少ない日本人
聖書学者である。しかしその訳語に反して、青野はこの箇所の中性形の語を「人」と

して捉えており、その人解釈を前面に出して彼独自の十字架の神学を構築している。青野は『「十字架の神学」の成立』の中で、十字架を救済の出来事としてより、むしろ「信徒の生の規定という視点」に重きを置いた理解を示し、『「十字架」が、救済の出来事としての生の根拠であるよりも、むしろパウロの『弱くかつ恐れ、ひどく不安である』あり方とパラレルをなすことがらとして理解されていることを示しているのである。だからこそパウロは1・26以下で、神の召しそのもの (klesis) (口語訳、共同訳、そして新共同訳の「召された時のこと」ではない) は、この愚かな者、弱い者、身分の低い者や軽んじられている者、すなわち無きに等しい者という生のあり方を担っている人びとを選ぶものであった、と述べるのであるし、2・1以下でも、パウロ自身の「弱さ」を担うあり方に言及するのである⁴¹と述べる。このところで青野は持論の十字架の神学を展開するために、この個所の訳語は自分が以前訳した岩波訳の中性形を表す「もの」ではなく、新共同訳の翻訳文である「愚かな者」等の「人」を表す訳語を用いる必要があったのであるが、言い方を変えれば、I コリ1:27の中性語を「中性の事柄」と解釈した時に、青野の十字架の神学に大きな影響を与えることが分かる。つまり彼の持論がこのI コリ1:27の訳語と解釈に大きく依存していることが読み取れるのである。さらに青野は「コリント市民の経済的・社会的状況を反映する形でパウロはこう述べる」と前置きし、「神は知恵ある者に恥をかかせるため、世の無学な者を選び、力ある者に恥をかかせるため、世の無力な者を選ばれました。また、神は地位のある者を無力な者とするため、世の無に等しい者、身分の卑しい者や見下げられている者を選ばれたのです⁴²と新共同訳聖書の文を続けることにより、経済的・社会的状況における底辺の人たちに神の選びがあったとパウロが主張している、という解釈をほどこしているのである。

しかしパウロは、このコリントの教会の共同体の全員がそのような人たちであったと言っているわけではない。26節の「人間的にみて知恵のある者が多かったわけではなく、能力のある者や、家柄の良い者が多かったわけでもありません」とのパウロの言葉から、この共同体にはそのような知恵のある者、能力のある者、家柄の良い者もいた事が分かるのであり、彼らもその反対の評価を受ける人たちと同じく、神の選びと召しを受けた人たちであった。とするならば、この世の愚かな者、弱い者、身分の低い者や軽んじられている者、無きに等しい者という、具体的に苦難の生を担っている人々に対して、神の召しと選びがあるのだという青野の論はパウロの主張「だれ一人、神の前で誇ることがないように」と矛盾すると言える。この矛盾は中性形を「人」として理解することに起因している。

2-4 Grosheide

Grosheide は “*Foolish things are here qualified by of the world, i.e. what the world considers foolish*”⁴³ と、A.S.V. の分類3の訳語を使用することにより、それがこの世が愚かとみなす「こと」であるとしている。そして脚注においてさらに説明を付け加え、τὰ μωρά の中性形が非常に大事であることに言及をしている。τοὺς σοφούς の男性形と異なり、「この中性形の語が神が選んだ人たちの特質を強調するために使われており（中略）τὰ μωρά はさらに多くの事柄を含む」⁴⁴ と説明を加えている。

さらに彼は27節の注釈の中で「選び」の項目を設け、「パウロがここで説明しているのは、神の働きは世の働きとは正反対であるということである。神は御自身のためにこの世から蔑まれたこと⁴⁵を選び、そしてそれは賢い者たちに恥をかかすためであった。すなわち別のより高い神的な知恵が存在し、それが賢さを作るということである。最終決断を行う神は、世自身が賢いとみなすことさえも間違いであることを示すことによってこの世に恥をかかせられるのである。同じ事が弱さにおいても言える。真に強くする神の力はあまりに強いのでこの世の強い事はそれに挑むことなどできないのである。この世の傲慢な態度に面したとき、教会は神御自身が教会を召し、選ばれたことを知って慰められるのである。だから教会は十字架につけられたキリストの方を証するのである」⁴⁶ と注釈をつけ、訳語に応じた「もの」としての語に相当する解釈を示している。

当該箇所のギリシア語を翻訳するにあたり各国の聖書学者が彼ら自身の解釈を反映させる形で訳語を探し、そしてまたその訳語に影響を受けつつ解釈がなされてきた具体例をいくつかみだ。その中でもこの四つの中性形をすべて「者（人）」と訳す分類1に入るのは、いくつかの日本語訳聖書のみであり、日本語以外の聖書はそのほとんどが中性を表す「もの（事）」を使用していることがわかる。しかし多くの注解者たちは、上記の分類2、3の訳語を用いつつ、また自らギリシア語から自国語に訳しつつ、これらの中性形の語を「人」として解釈していることが見て取れる。

このような解釈が出てきた可能性としては、τὰ μωρά の対比としておかれた τοὺς σοφούς が男性形で明らかに人を示していることから、この「知恵ある者」に恥をかかせるために神に選ばれた τὰ μωρά も「愚かな者」という「人」ではないかという解釈が一つ挙げられるだろう。しかしこの理由にたいして、「愚かな者」「無学な者」など「人」を表したかったのであれば、パウロはここで男性形を用いることができたのに、なぜ男性形ではなくこの τὰ μωρά という中性形を用いたのかという大きな疑問が浮かび上がる。また τὰ ἀσθενῆ と τὰ ἰσχυρά はどちらも中性形であり、この後半の対比を敢えて「人」と解釈する必然性はない。中性形として「力ある事」に恥をかかせ

るため「弱い事」が選ばれたと訳す方が、より自然な訳語であり解釈であるといえる。

以上の疑問に対し、次項において文法的側面からと、パウロの手紙に見られるパウロ自身の言葉の使い方から考察をする。

3、「人」か「事」か

3-1 文法的視点 (Blass & Debrunner の文法書から)

Conzelmann はその注解において「人物の中性名詞的用法はその属性を強調している、BI-Debr 138₁、(属格と共に263₄)」⁴⁷と Blass & Debrunner の文法書を解釈の基礎として挙げている。

Blass & Debrunner、Funk による訳と改訂版、*A Greek Grammar of the New Testament and Other Early Christian Literature*⁴⁸によると、「中性形は時として人物に言及するとき使用される、それは個々人ではなくその一般的性質を強調する時である」⁴⁹として、ヨハネ3:6の τὸ γεγεννημένον と I ヨハネ5:4の τὸν⁵⁰ γεγεννημένον が例として挙げられている。その後ガラテヤ3:22、ヨハネ12:32と続き、その後に I コリ1:27の三つの中性複数語が挙げられ、複数の理由として25節との関連を挙げている。これらの例文はいくつかの日本語の新約聖書ギリシア語文法書にも採用されており⁵¹、そのゆえに日本語訳聖書では「中性形であるがこれは人物のことである」⁵²との注を書き加えられる一番の理由となっていると思われる。

しかしここにおいて重要な問題が見出される。パウロ書簡からの例文、ガラテヤ書3:22と I コリ1:27のパウロ書簡の事例は Funk が訳した改訂版である9版から載せられているが⁵³、8版までのドイツ語原本にはない⁵⁴。これは Blass の文法書に Debrunner がテキストを解釈して付け加えた事を示している。そして9版のドイツ語版においては付け足されたことがわかるようガラテヤ書と I コリの例文はそのセクションの本文の後付となっているが、Funk はこの箇所を元の位置から本文の中へと移し、あたかもこれが Blass & Debrunner に最初から掲載されていたかのような印象を与える操作をしている。

そしてさらにガラテヤ3:22においては男性複数名詞 τοῖς πιστεύουσιν と中性複数形 τὰ πάντα をパウロは書き分けており、前者が「信じる人々」であることは男性形であることから明確に判断されるが、後者の中性形の語 τὰ πάντα は人として解釈するほうが中性の語と解釈するよりも文法的説明を必要とすると思われる。ちなみに日本語の新共同訳聖書においてはこのところを「もの」と中性的に訳しており Blass & Debrunner 9版の説とは反対の立場を表明している。

I コリ1:27の中性複数形については Debrunner の説明は25節の中性単数形と混同するおそれがあるので、それゆえに複数にしたのであるとの簡単な説明にとどまっているが、日本語訳聖書ではこれを「人」と訳す根拠としているのである⁵⁵。

このように中性形の語を「人」として捉えることについての新約聖書ギリシア語文法書における説明は単数形についても例証のすべてが確実性のあるものとはいえず、特にパウロの手紙からの例文は「人」として解釈するより、「事」として解釈する方がふさわしい印象を受ける。また複数形についての例示は、本研究のこのI コリ1:27のみであり客観的資料とはなりえていない。そしてそれさえも9版から追加されたもので8版まではそのような例証がないということも合わせると、これらの例証と解釈が解釈者の恣意に大きく影響されていることが確認され、文法的例証となっていないことが明らかである⁵⁶。

しかしある注解書において解釈者はこれがパウロの用法であると述べている⁵⁷。それゆえ次に、パウロの真正書簡の中に、果たしてそのようないわゆるパウロ独自の用法があるのかを検証する。

3-2 パウロの用法

この項ではパウロの真正書簡の中でパウロが中性名詞を使用することによって「人」を表そうとしている箇所があるのか、また中性名詞を「人」と解釈し訳している例があるのかを見る⁵⁸。しかし冠詞のつかない名詞は中性形の抽出が困難であることから名詞又は名詞的用法の冠詞付きのみを考察対象とする。そして男性名詞と中性名詞は属格と与格が同じであるのでそれらの格の中性名詞だけを選別することが極めて困難であること、そして主格・対格においても単数はその数が非常に多いこと⁵⁹から、本稿において対象としている複数形の主格と対格であるところのτάのみをその考察の対象とする。

3-2-1 τάの用例

まずパウロの真正書簡の中にあるτάを網羅してそれらがどのように訳されているかを調べる⁶⁰。

七つの書簡の中でパウロはτάを190回使用しており、1章27、28節の7回を除き、中性形を人として訳しているのは、τέκνα「子供たち」6回、ἕθη「異邦人」12回のみであり、残りの165回はこれを「もの」或いは「事柄」と解釈し訳していることが見られた。このτέκναとἕθηはもともと中性名詞であることから冠詞も中性形を使用するのが当然であり、それゆえパウロ書簡においてこの二つの名詞以外で中性形を「人」

として訳しているのは I コリ 1:27、28 の当該箇所のみであり、この個所の訳が特株な例であることがわかる。

3-2-2 I コリ 1:27 の二つの形容詞の用例

次に本研究の考察対象語である二つの形容詞のみに限定し考察をしてみる⁶¹。

当該考察箇所を除き $\mu\omega\rho\acute{o}\varsigma$ は全部で3回使用され、その内男性形が2回、中性形1回、 $\acute{\alpha}\sigma\theta\epsilon\iota\upsilon\eta\varsigma$ は当該箇所を除き全部で14回、その内男性形が9回、女性形2回、中性形3回となっている。そしてそのいずれも例外無しに男性形は「人」を表し、中性形は「事」を指し示している。この事はパウロがこれら二つの形容詞の変化形をそれぞれの文の主語に応じて使い分けていることを示しており、「人」を表そうとするときは男性形を用い、「事」を表そうとする時には中性形を用いていることを示している。

そしてさらに特記すべきことは、パウロは人を表すために I コリ（本研究箇所の他の部分）の中で $\mu\omega\rho\acute{o}\varsigma$ の男性形を2回用いており（3:18⁶²、4:10⁶³）、 $\acute{\alpha}\sigma\theta\epsilon\iota\upsilon\eta\varsigma$ の男性形も冠詞無しでは4回（4:10⁶⁴、8:10⁶⁵、9:22⁶⁶、11:30⁶⁷）、冠詞付で3回（8:9⁶⁸、9:22⁶⁹、9:22⁷⁰）使用しているのである。

この事はこの書簡においてパウロがこれらの形容詞を用いて人を表したい時には男性形を使うことを示しており⁷¹、パウロが中性形を用いて「人」を表す独自の用法を用いるという例はみられないことがわかる。

文法的考察として Blass & Debrunner から新約聖書における中性形の用法をみたが、版を重ねていく過程や、またその翻訳において版者や訳者の解釈が挿入されてきたことが見られた。そしてまた中性形の語で「人」と訳されている他の例文においても、その中のいくつかは新共同訳聖書においてすら中性的に「もの（事）」と訳されており、この文法書の説明をもって「人」解釈の根拠とするには無理があると思える。そしてこの Blass & Debrunner の文法書を参照しつつ、Grosheid や Conzelmann は、人のもつ特性に特化をした「愚かさ」「弱さ」との解釈をほどこしている。

またパウロの用法の考察からは、パウロ独自の用法というものは見られず、中性形は中性の事柄に、男性形は人を表すときに用いられていることが明らかである。特に本研究で問題としている I コリ 1:27 で表されている神が選んだほうの中性形で表されている形容詞の名詞的用法の男性形を、パウロはコリントの人々をさすために同書簡で数回使用していることの確認は大きな意味があると思える。それはパウロが「愚かな者」という「人」をあらわしたい時には男性形を用いることを示しており、ここであえて中性形を「人」を表すために使用する必然性がないことを示しているのである。以上の考察を経てこれらの中性形は「事」を表していると結論付けられる。

4、「事」で示される神の選び

前項において「事」と結論付けたこれらの中性形がはたして何を意味しているのかをこの項で考察する。まず、これらの語を修飾している τοῦ κόσμου（世の）を考察した後、これら二つの中性形の具体的な内容を考察する。

4-1 τοῦ κόσμου 「世の」

一般的用法としてギリシア語の属格は所有や部分を表すが、また目的と主語の両方の意味を表しうる⁷²。当該個所の τὰ μωρά、τὰ ἀσθενῆ をこの世の部分と捉えると、「この世の愚かさ・弱さ」は神の対立概念としての被造物世界の一部分であり、それは徹頭徹尾この世界のものとなるであろう。考察対象の中性形が今まで「人」と解釈されてきた理由がそこに読み取れる。

しかしこの属格を主格属格と捉えるならば、そしてパウロは彼の書簡においてその用法をよく使用するのであるが、それはこの世が愚かとみなすものと解釈できるのである⁷³。パウロは「霊」と「肉」の対比をレトリックとして用いるが、そのレトリックからみると「この世（肉）が愚かとみなすもの」とは、「霊」に属することであり、この世に属さない「霊」的な「神の事柄」（1:18-25）を示唆していると考えられる。

4-2 “τὰ μωρά” 「愚かなこと」、 “τὰ ἀσθενῆ” 「弱いこと」

まず μωρός⁷⁴ は4回（当該個所を含む）使用されているがその内男性形の二つ（I コリ3:18, 4:10）は主語の男性形を受けて、その述語的用法として使用されていることがわかる。残りの二つの内1章25節の「神の」という修飾を受けた〈愚かさ（単数）〉は冠詞付形容詞の名詞的用法単数主格として、「神の愚かさは」という主語を形成している。そして本研究対象箇所「世の」という修飾を受けた〈愚かさ（複数）〉は冠詞付形容詞の名詞的用法複数対格として、「世がみなす愚かさ」という、神の選びの目的語を形成していることがわかる。そしてこの2箇所の語は、他の2回の使用とは異なり、何かを修飾するための述語的な使われ方ではない、特殊な使われ方がされていることがわかる。

次に ἀσθενής⁷⁵ であるが、この使用は全部で15回（当該個所を含む）であるがその内9回の男性形（ローマ5:6, 1コリ4:10, 8:9, 8:10, 9:22×3, 11:30, I テサ5:14）の使用においてはそのすべてのケースで人を指していることが読み取れ、また2回の女性形（I コリ8:7, II コリ10:10）はその修飾する名詞が女性形であることから必然と思える。また中性形の使用の内ガラテヤ4:9は諸霊という中性名詞を修飾するためのものでありこれも必然と考えられる。あとに残る I コリ1:25と同1:27の箇所の中性形のみ

が、μωρόςと同じ特別な例となっていることがわかる。

「神の愚かさは人よりも賢く、神の弱さは人よりも強いからです」(I コリ1:25)。この「神の愚かさ・神の弱さ」を説明しようとしてパウロが使用をしている語に、ある特徴を見出せる。それは μωρία 〈愚か〉という女性名詞である。この語は LXX の中でシラ書に2回、パウロの手紙では同書簡に5回しか使用されていない非常に使用頻度の少ない語であるが、しかしパウロはそのうちの3回をこの段落で使用している⁷⁶。

その使用法は訳文だけではわかりにくいので、説明をつけて表すと以下のようになる。

18節 十字架の言葉(男性名詞)は愚かなもの(女性名詞)

21節 宣教(中性名詞)の愚かさ(女性名詞)によって信じるものを救おうとお考えになった⁷⁷

23節 十字架につけられたキリスト(男性名詞)は……異邦人には愚かなもの(女性名詞)⁷⁸

ギリシア語では修飾をする時は基本的に修飾語と被修飾語に同性・同形を使用するが、この〈愚かなもの・愚かさ〉と訳されている女性名詞が、18節の「十字架の言葉」(男性名詞)、21節の「宣教」(中性名詞)と23節の「十字架につけられたキリスト」(男性名詞)を説明するために特別に使われていることがわかり、女性名詞のもつ一般的概念の〈愚かさ〉でこの三つの言葉をくくろうとしているのが読み取れるのである⁷⁹。

つまりこの女性名詞〈愚かさ〉でくくられた三つの語「十字架の言葉」「宣教」「十字架につけられたキリスト」が一般的概念としての(つまりこの世が愚かとみなすところの)〈愚かなもの〉であることに焦点が当てられ、浮き彫りにされている。そしてこの三つの言葉を包括した「神の出来事」を25節で「神の愚かさ」という語で表そうとしたと考えられるのであるが、その具体的内容が三つの前述の言葉であることを示すために、かれは「その」という「冠詞」を必要としたと思える。

そして27節において25節と同じ語が、複数形になっていることの意図を探るために本文を示したい。

25節 : ὅτι τὸ μωρὸν τοῦ θεοῦ σοφώτερον τῶν ἀνθρώπων ἐστὶν
καὶ τὸ ἀσθενὲς τοῦ θεοῦ ἰσχυρότερον τῶν ἀνθρώπων.

27節：ἀλλὰ τὰ μωρὰ τοῦ κόσμου ἐξελέξατο ὁ θεός, ἵνα καταισχύνη τοὺς σοφοὺς,
καὶ τὰ ἄσθηνῆ τοῦ κόσμου ἐξελέξατο ὁ θεός, ἵνα καταισχύνη τὰ ἰσχυρά,⁸⁰

このように I コリ1章の25節と27節を並置してみると、きわめてよく似た文型になっていることが読み取れる。「神の」という属格を伴う「愚かさ」（単数）「弱さ」（単数）が人間のそれ（本文では省略）よりも「より賢く」「より強い」と述べられており、それを受けのように、27節で「世の」という属格を伴う「愚かさ」（複数）「弱さ」（複数）が賢い者に恥をかかせるために、また力あることに恥をかかせるために、神によって選ばれた、とパウロが述べていることがわかる。

25節で「神の愚かさ・弱さ」として単数形で示された事柄は三つの「神の出来事」であると先に提示をした。そして次の26節でコリントの信徒たち一人一人の召しが語られる。彼らの具体的な現実の生に向けて語られているが、彼らの召しの具体的理由は人間の所有している立派さやすばらしさ、頭の良さや権力の有無、家柄の良さではない、と述べることにより、いま選びに召された真の理由に思いを向けさせようとしている。それは「神の出来事」を、自分のものとして受け取ったコリントの信徒たちの信仰であり、その「神の出来事」（25節の単数）と彼らの「信仰」が27節において「愚かさ・弱さ」の複数形として表されたのであると解釈できるのである。

4-3 パウロの主張との整合性から

コリント書を注解しているすべての学者（27節の中性語を「人」と解釈する人、と「事」と解釈する人）が主張しているように、この段落の結論は29節と31節の、「だれ一人、神の前で誇ることがないようにするため」、「誇る者は主を誇れ」であると考えられる。これがパウロの主張であるなら、神が人間の知恵の有無や力の有無で選びを左右するという27節の解釈はこの主張に矛盾していることになる。

パウロが「霊」と「肉」との対比のレトリックを用いて持論の展開をすることはよくみられる⁸¹。このレトリックに従って恥をかかせられるものが、「肉（この世の人やもの）」であり、神が選んだものが「霊（神の出来事）」であるとしたとき初めて、この「誇る者は主を誇れ」という結論を導きだしたパウロの意図を理解することができるのである。

それはまた「事」解釈の Grosheid と Conzelmann の注釈にも見られる。両者とも27節のこれらの語に対しては具体的な指摘はしていない⁸²。けれども、Conzelmann は29節の注解において「神の選び」の対象に“Fremdheit”〈他者性〉という具体的記述をしている。このことは27節における神の選びがただ単に人間のもつ〈愚かさ〉ではなく、「十字架の言葉」、「宣教の愚かさ」、「十字架につけられたキリスト」、という

神に属する〈愚かさ〉であることを示唆すると受け取れる。そしてこの三つの愚かさ
とそれを信ずるといふ愚かさによって救いに入れられたコリントの信徒の信仰も含め
たものが、Grosheidが「さらに多くのことを含む」と指摘した、具体的な内容なの
ではないだろうか。

5、まとめ

I コリ1:27にある三つの中性形がなぜここだけ「人」としての訳語があてられ、
「人」として解釈がほどこされているのかに疑問を持ったところからこの考察が始
まった。「ところが、神は知恵ある者に恥をかかせるため、世の無学な者を選び、力
ある者に恥をかかせるため、世の無力な者を選ばれました」（新共同訳）という翻訳
文を読む限りにおいて、パウロは、“神が人を救うにあたり、知恵ある者は選ばない
で無学なものを選び、力ある者を選ばないで無力な者を選んだ”と主張しているよう
に読み取れる。この中性形の語を「人」と捉え、人を表す訳語をあてた翻訳者の解釈
が読む人に大きな影響を及ぼすことがわかる。しかし、神の選びが人間の社会的・政
治的な弱者を選んで与えられる、とパウロが語っていると読み取れるのは、この箇所
だけである。

そしてこの箇所が含まれる段落においてもパウロの主張の要点は「誰一人、神の前
で誇ることがないようにするため、……『誇る者は主を誇れ』」である。当該の中性
形を「人」と理解する解釈からはこの結論に至るのには無理があるのにもかかわら
ず、訳語の影響からこの論理に疑問を抱くことさえできない状況が生じていた。

中性形を歴史的に検証した結果、様々な解釈があることが解り、さらに文法書を調
べることにより中性形を「人」と解釈する根拠のない事が確認された。かつ「人」と
理解することにより人間の側に救いの条件があるかのような解釈が生じることも確認
された。神の選びの対象である中性形の語が「人」ではなく「事」であるとの確認を
経て、ではその「事」は何を意味しているかを考察した。

18節、21節、23節に「愚かなもの」という女性名詞で三つの言葉が修飾されてお
り、それらは「十字架の言葉（男性名詞）」「宣教（中性名詞）」「十字架につけられた
キリスト（男性名詞）」である。この三つの語を包括したものとして25節で「神の愚
かさ・弱さ」という「神の出来事」が単数として示され、それを「信仰」をもって受
け取った信徒（26節）が加えられ複数形として27節に提示されている。この解釈を通
して初めて「誇る者は主を誇れ」というパウロの主張する結論にこの27節が合致する
ものとなるのであり、他の書簡でみられるパウロの主張と同じとなることが確認でき

る。

神の選びは「学がない」「力がない」というような人間の側の要因に（たとえそれらが人間的にみて傲慢さの反対の要因であったとしても）左右されるものではなく、ひとえに「十字架の言葉」「十字架につけられたキリスト」とその「宣教」という愚かと思える「神の出来事」を、信仰を持って受け入れる愚かさにある。

注

- 1 この拙稿は2008年3月提出、同志社大学大学院修士論文『パウロにおける神の選び「人」か「事」か——コリントの信徒への手紙一1章27節の三つの中性形の解釈を通して——』（神：770）の一部を2008年度6月関西新約聖書学会において発表し、さらに加筆修正したものである。
- 2 太字筆者。
- 3 これら四つの語は形容詞に冠詞を付したもので名詞的用法と呼ばれ、名詞と同じ働きをする。
(Moulton, *A Grammar of New Testament Greek*, vl.III, Ch1, § 1, 2)
- 4 コリントの信徒への手紙一1章27節（新共同訳）、太字は筆者。
- 5 Septuaginta（ギリシア語旧約聖書）は、略語 LXX、Ralf 校訂によるものを使用。この163回には「トビト」のシナイ写本とダニエル・テオドツィオン訳が延べとして加算されている。
- 6 この動詞の考察については前掲拙論3章1節2と別表3を参照されたい。
- 7 表現の些少な違いは各聖書にあるが、それが「人」をあらわしているのか、「事」（人ではない事柄）を表しているのかということで、大まかに分類する。
- 8 1、『舊新約聖書』、聖書協会聯盟（略称文語訳）。
2、『新契約聖書』、永井直治訳、1960年（略称永井訳）。
3、『詳訳聖書 新約』、1962年（略称詳訳）。
4、『聖書』（1955年改訳）、日本聖書協会、1965年（略称口語訳）。
5、『新約聖書』、フランシスコ会聖書研究所訳注、1979年（略称フランシスコ会訳）。
6、『コリント人への手紙上』、岩隈直、1980年（略称岩隈訳）。
7、『パウロ書簡』、青野太潮訳、1996年（略称岩波訳）。
8、『聖書 新共同訳』、日本聖書協会、2001年（略称新共同訳）。
- 9 1、Latin Vulgate（略称 V.U.L.）。
2、Die Bibel (Revidierter Text), Murtin Luthers, 1967（略称 L.U.T.）。
3、Bible (Revised Standard Version), 1952（略称 R.S.V.）。
4、Bible (New Revised Standard Version), 1989（略称 N.R.S.V.）。
5、The Holy Bible (New King James Version), 1990（略称 N.K.J.V.）。
6、Bible (New International Version), 1991（略称 N.I.V.）。
- 10 分類2の LUT は独語聖書。独語名詞には男性形、女性形、中性形の性別があるが、その複数形が同形

であるため、中性形を残すためあえて単数形にしたと考えられる。

- 11 多くの英語聖書では英語の文法上、名詞に性別がないにもかかわらず、**things** などの語を補って中性形であることをはっきりと残そうとする努力が見られる。
- 12 τὰ ἄσθενῆ との対比で恥をかかせるために挙げられている語は、τὰ ἰσχυρά で中性形である。I コリ1:27 節前半の対比が〈中性形－男性形〉であるので、後半の対比も〈中性形－男性形〉に訳している聖書があり、そのパターンを入れると4種類になる。
- 13 日本人による注解書8冊。
 - 1、青野太潮、「コリントの信徒への手紙」（大貫隆他監修、『新版総説新約聖書』日本キリスト教団出版局、2003年）。
 - 2、内村鑑三、『内村鑑三聖書注解全集十二巻』、山本泰次郎編、教文館、1960年。
 - 3、高橋敬基、「ローマの信徒への手紙 — ヨハネの黙示録」（高橋虔他監修、『新共同訳 新約聖書注解Ⅱ』、日本基督教団出版局、1991年）。
 - 4、蓮見和男、『コリント人への第一の手紙』、新教出版社、1996年。
 - 5、松永晋一、「コリントの信徒への手紙—」（荒井猷他、『総説 新約聖書』、日本基督教団出版局、1981年）。
 - 6、松本卓夫、『コリント前書』、現代新約聖書注解全書刊行會、1933年。
 - 7、宮村武夫、「使徒の働き — エペソ人への手紙」（増田誉雄他編、『新聖書注解新約Ⅱ』、いのちのことば社、1982年）。
 - 8、山室軍平、『コリント前書 コリント後書』、教文館、1971年。
- 14 外国人による註解書11冊（訳本含む）。
 - 1、C. K. Barrett, *The First Epistle to The Corinthians* (Black's New Testament Commentary), Hendrickson Publishers, Massachusetts, 1968.
 - 2、J. Calvin, *Commentary on the Epistles of Paul the Apostle to the Corinthians*, translated from the original Latin, and collated with the author's French version by J. Pringle, the Calvin Translation Society Edinburgh, 1848 (カルヴァン、『カルヴァン・新訳聖書注解Ⅷ コリント前書』、田辺保訳、新教出版社、1960年。この日本語訳は1855年のフランス語版を和訳したものである)。
 - 3、H. Conzelmann, *Der erste Brief an die Korinther*, Vandenhoeck & Ruprecht, Göttingen, 1981 (H. Conzelmann, *A Commentary on the First Epistle to the Corinthians*, translated by James W. Leitch, Fortress Press, 1975).
 - 4、D. E. Garland, *1 Corinthians* (Baker Exegetical Commentary on the New Testament), Baker Academic, Grand Rapids, 2003.
 - 5、F. Godet, *Commentary on St. Paul's First Epistle to the Corinthians*, translated from the French by A. Cusin, T. & T. Clark, Edinburgh, 1886.
 - 6、F. W. Grosheide, *Commentary on the First Epistle to the Corinthians* (the New International

- Commentary on the New Testament), W. M. B. Eerdmans, Grand Rapids, 1980.
- 7、 R. A. Harrisville, *1 Corinthians* (Augsburg Commentary on the New Testament), Augsburg Commentary on the New Testament), Augsburg Pub. House, Minneapolis, 1987.
- 8、 R. B. Hays, *First Corinthians* (Interpretation), John Knox Press, Louisville, 1997 (R・B・ヘイズ、『コリントの信徒への手紙1』、焼山満里子訳、日本基督教団出版局、2002年)。
- 9、 L. Morris, *the First Epistle of Paul to the Corinthians* (the Tyndale New Testament Commentaries), The Tyndale Press, London, 1958 (L・モリス、『コリント人への手紙第1』、村井優人訳、いのちのことば社、2005年)。
- 10、 A. C. Thiselton, *the First Epistle to the Corinthians, a Commentary on the Greek Text* (the New International Greek Testament Commentary), W. B. Eerdmans, Grand Rapids, 2000.
- 11、 H.-D. ヴェントラント、『コリント人への手紙』、(NTD 新約聖書註解7、塩谷饒他訳、NTD 新約聖書註解刊行会、1974年。
- 15 これらの注解書もほんの一例である。この8冊と11冊の選択に特別な意味はなく、手に入れやすいものを選んだ。
- 16 外国人による注釈書のうち、原本が独語で英訳・和訳のあるもの、および原本が英語で和訳のあるものはそれを参考にした。解釈者の表記言語は主に参考にした注釈書の言語によるものとした。
- 17 青野、前掲書、234頁参照。新約聖書翻訳委員会(青野)、『聖書を読む——新約篇』、岩波書店、2005年、79頁参照。青野、『「十字架の神学」の展開』、新教出版社、2006年、161頁参照。
- 18 内村、前掲書、39頁参照。
- 19 高橋、前掲書、79頁参照。
- 20 蓮見、前掲書、22～25頁参照。
- 21 松永、前掲書、434頁参照。
- 22 松本、前掲書、64頁参照。
- 23 宮村、前掲書、290頁参照。
- 24 山室、前掲書、23頁参照。
- 25 ヴェントラント、前掲書、50頁参照。
- 26 カルヴァン、前掲書、51頁参照。
- 27 cf., Barret, *ibid.*, p. 58.
- 28 cf., Garland, *ibid.*, pp. 75f.
- 29 cf., Godet, *ibid.*, pp. 111f.
- 30 cf., Harrisville, *ibid.*, p. 42.
- 31 cf., Hays, *ibid.*, pp. 31-33.
- 32 cf., Thiselton, *ibid.*, p. 184.
- 33 cf., Conzelmann, *ibid.*, pp. 71f.

- 34 cf., Grosheide, *ibid.*, pp. 51f.
- 35 cf., Morris, *ibid.*, pp. 48f.
モリス、前掲書、村井優人訳、53頁において「それに加えて、おそらく十字架による救いのことも意図されているのだろう」との記述がある。この訳本は2版のものであり、Morris は再版に際し、自ら大幅な書き換えを実施したことをその序で明らかにしている。初版にはなかったこの文はこれらの中性語を Morris が再解釈した結果であると思われる。
- 36 カルヴァン、前掲書（脚注13の2）。
- 37 カルヴァン、前掲書（脚注13の2）、3頁。凡例3によると、「聖書本文は、現行口語訳にもとづきつつ、カルヴァンの訳によって修正したものである」とある。カルヴァンはエラスムスのラテン語訳に影響を受けつつも、決してそれを鵜呑みにすることなく彼自身の原語からの訳を解釈のもととして用いている。（Calvin: *Commentaries Newly translated and edited* by J. Haroutunian, SGM Press, London, 1958, Introduction pp. 18f.）
- 38 カルヴァン、前掲書、51頁、太字はママ。
- 39 ただしカルヴァンはこの解釈が偉大な人、身分の高い人から救いの望みが取り上げられているとの結論を引き出すことになることと、また、人がその愚かさ、弱さ、身分の低さを誇る結果になることを恐れて、そのことにははっきりと否を主張している。
- 40 ヘイズ、前掲書（脚注13の8）。
- 41 青野太潮、『「十字架の神学」の展開』、新教出版社、1989年、11頁。
- 42 同上、161頁。『新版総説新約聖書』、234頁にも同様の個所あり。
- 43 Grosheide, *ibid.*, p. 51.
- 44 Grosheide, *ibid.*, p. 51私訳。
- 45 what を使用して「事」であることが明らかである。
- 46 Grosheide, *ibid.*, P. 51私訳、イタリック体ママ。
- 47 Conzelmann, *ibid.*, p. 71.
- 48 F. Blass & A. Debrunner, *A Greek Grammar of the New Testament and Other Early Christian Literature*, Translation and Revision of the ninth-tenth German edition incorporating supplementary notes of A. Debrunner by R. W. Funk, 1961.
- 49 *Ibid.*, p. 76, § 138私訳。
- 50 Iヨハネ5:4の原文は τὸν γεγενημένον ではなく τὸ γεγενημένον である、誤植か。
- 51 岩隈・土岐、前掲書、3頁。
- 52 松永、前掲書、434頁。
- 53 Blass & Debrunner, by Funk, *ibid.*, p. 76.
- 54 F. Blass, *Grammatik des neutestamentlichen Griechisch*, Bearbeitet von A. Debrunner, 8Auffl., 1949, p. 68.
- 55 松永、前掲書、434頁。

- 56 ヨハネによる福音書とヨハネの手紙の具体例の考察は紙面の都合で割愛した（前掲拙論2章1節1を参照）。その他、古典ギリシア語の文法書では中性形の使用において「人や事柄の集合を示す」として例を挙げているが人そのものを表すというよりも暴力などの事柄を表している。（H. W. Smyth, *Greek Grammar*, Revised by G.M.Messing, 1963. § 197, § 1024, § 1026参照）。
- 他、Moulton にも中性形についての言及はあるが、「中性形は人への言及に用いられることもあるが、それは個々人ではなく、たとえば愚かさのような一般的な特質について強調する時に用いられる。（J. H. Moulton, *A Grammar of New Testament Greek*, Edinburgh, T. & T. Clark, 1963, viiiSyntax, P. 21）と Blass & Debrunner と同じ記述となっている。I コリ1:27の複数形についても Blass & Debrunner と同様。
- 57 Barrett, *ibid.*, p. 58.
- 58 新共同訳聖書の訳語をその考察対象とする。
- 59 パウロ書簡中で主格・対格の冠詞のついた中性・単数形は377である。
- 60 本稿の字数制限によりその詳細をここで提示することはできないので、前掲拙論別表1-1～1-14を参照されたい。
- 61 前掲拙論、別表2-1～2-2参照。
- 62 コリントの教会の信徒をさしている。
- 63 パウロは自分たちのことをさして使っている。
- 64 パウロは自分たちのことをさして使っている。
- 65 コリントの信徒をさして使っている。
- 66 一般的概念として。
- 67 コリントの教会の信徒をさしている。
- 68 コリントの教会の信徒をさしている。
- 69 一般的概念として。
- 70 一般的概念として。
- 71 男性形を用いることによりコリントの信者に対してきつい言い方になるのを和らげるため中性形を使って一般化したのであると Barrett は解説している（Barrett, *ibid.*, p. 58）が、同じ書簡の中で男性形を用いてコリントの人たちを指している箇所があるのである。
- 72 高津春繁、「ギリシア語読本編」『基礎ギリシア語文法 文法篇・読本篇』、1951年、114頁（§ 110～113）。織田昭、『新約聖書のギリシア語文法』、2003年、715～717頁、（§ 265, 1, b, e, f）。
- 73 フランシスコ会訳ではこの箇所を「しかし、神は知恵のある人を恥じ入らせるために、この世で愚かともなされているものを選び出し、また、神は強いものを恥じ入らせるために、この世で弱いともなされているものを選び出されました」としている。また Garland は「わたしはこの文を『世が愚かともみなすこと』と訳している」（Garland, *Ibid.*, p. 76）と説明している。
- 74 前掲拙論、別表2-1参照。

- 75 前掲拙論、別表2-2参照。
- 76 前掲拙論、別表4-1参照。
- 77 I コリ1:21私訳。
- 78 20節の「神は世の知恵を愚かなものにされたではないか」という新共同訳は「神が世の知恵を愚かにした」（私訳）と動詞で表されており、前後の女性名詞で表される「神の出来事」の人間の観点からの「愚かさ」と別の視点を表そうとして書き分けていることが読み取れる。
- 79 「性質や状態を示す抽象的な語としての女性形」（Smyth, *ibid.*, p. 46 § 199c）。
- 80 太字は筆者。
- 81 ローマの信徒への手紙8章など。
- 82 Grosheid はこの中性形は多くの意味を包含していると、中性形の脚注で述べてはいるが具体的な内容には触れていない。